

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

英国詩人・作家の詠ったスイス

| | |
|------|---|
| 著者 | 鈴木 雅光 |
| 著者別名 | Masamitsu Suzuki |
| 雑誌名 | dialogos |
| 号 | 11 |
| ページ | 117-132 |
| 発行年 | 2011-03 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1060/00005056/ |

英国詩人・作家の詠ったスイス

鈴木雅光

1 はじめに

スイスとイギリスは関係があるか。スイスは山にイギリスは海に囲まれていて、スイスとイギリスは地理的にあまり関係がないように思われる。しかし、コンラッドは「なぜか分からないが、イギリスとスイスは驚くほど似ている」と述べている⁽¹⁾。このことが何を意味するのか不明だが、イギリスの詩人や作家たちは驚くほどスイスを訪れ、そこで目の当たりにしたものを詩や小説に描いた。その結果、スイスのイメージが作り上げられた。本稿ではイギリス人によって作られたスイスを考えてみたい。

2 アルプス神話

18世紀、イギリスの豊かな貴族の子弟が教育の仕上げに大陸旅行に出かけた。いわゆるグランドツアーである。ジュラ山脈を越えた若者たちは、故郷イギリスにないアルプスの山塊を目の当たりにして、驚きの声を上げる。この頃、ルソーの「アルプス山麓の小さな村に住む恋人たちの手紙」とロマンチックな副題が付けられた書簡集『新エロイズ』(1761)によって、スイスブームが起こっていた。18世紀半ば、スイスではイギリス人旅行者が殊の外目立っていた。1764年の調査によると、あるスイスの宿の宿泊客20人中14人がイギリス人であったという⁽²⁾。さらに19世紀に発展した観光産業によって、大陸旅行は大衆化していき、イギリス人にとってアルプスは憧れの対象となった。筆者はこれを「アルプス神話」と呼んでおく。

スイスのアルプス神話はイギリス人によって作られた。最初は、詩人によってアルプスの山塊が、驚愕の、崇高の、あるいは神々しさの対象として詠わ

れた。次に、大衆によってアルプス神話が作られた。19世紀にイギリス人によるスイスへの観光旅行がブームとなり、トーマス・クックの企画したパッケージツアーで、スイス旅行が大衆化した。1863年に、トーマス・クックは初めて、パリからジュネーブ、ロイカバード、インターラーケン、ベルン、ヌシャテル、ローザンヌなどのルートで、21日間のスイス旅行を企画したのだった。

イギリス人たちは、18世紀から19世紀前半に、詩人たちが詠った「筆舌に尽くせぬほどの驚嘆」や「大感動」⁽³⁾を追体験しようと、アルプスに大挙して押しかけるようになる。1869年に、ヴィクトリア女王がスイスで休暇を過ごすと、イギリス人のスイス熱を刺激し、女王が滞在した村は、イギリス人で溢れかえることになった⁽⁴⁾。また、19世紀にアルプス登山というアルピニズム (alpinism) が流行し、スイスの主峰39座のうち31座は、イギリス人によって初登頂された。これはイギリスという国の威信をかけた登山でもあった。

このような歴史的流れを見ると、スイスのイメージがイギリス人によって作られてきたことが分かる。

3 スイスという想像力

スイスを訪れて、そこでの見聞を作品に残したイギリスの詩人や作家が多い。なぜであろうか。スイスには詩人や作家の想像力に翼を与えるものがあるようだ。この国には想像力の源泉になるものが存在するのである。では、それは何か。

哲学者バークレイ (George Berkeley, 1685–1753) は、イギリスの田園風景や牧草地はそれなりにすばらしいが、最高の詩の題材ではないから「岩や断崖絶壁を描けるようになるためには、アルプス越えの経験が是非とも必要だ」と述べ、アルプスの荒々しい山岳風景を讃えている⁽⁵⁾。

当時、グランドツアーと呼ばれる大陸旅行が、イギリスの裕福な家庭の子

弟に流行し、彼らが旅の途中出会ったアルプスでの驚愕体験がイギリスに伝えられると、アルプスの崇高 (sublime) はイギリス人の憧れとなった。イギリスの詩人たちもスイスを訪れた。ワーズワース以前の詩人たちには、オリバー・ゴールドスミス、トーマス・グレイ、ホラス・ウォールポール、ジェイムズ・ボズウェルなどがある。

トーマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-1771) の場合を見てみよう。グレイはアレグサンダー・ポープにつぐ 18 世紀 2 番目の詩人と言われる。グレイはグランドツアーに友人のウォールポールと 1739 年 3 月 29 日出発した。23 歳の時である。最初フランスに滞在し、11 月にアルプス越えをした。そこからイタリアに行き、主にフローレンスに滞在した。ローマやナポリなども訪れた。二人は 1741 年にヴェニスに行ったが、5 月にそこで喧嘩別れをしている。その後グレイはヴェニスに一人で滞在し、9 月にロンドンに戻った。実に 2 年半もの大陸旅行であった。

グレイが大陸旅行に出かける頃には、詩人や批評家たちによって既に崇高が語られ、恐ろしい断崖や壮大な廃墟などが崇高をもたらすものとされていた。従って、グレイもそういうことを期待して旅に出たのである⁽⁶⁾。その期待は早々にやって来た。グレイはアルプス越えの際、下の引用が示すように「どの断崖も、どの急流も、どの絶壁も宗教や詩を示唆している」と興奮して述べている。当時のアルプス越えは道無き道を行くようなもので、上を見れば巨大な山塊がそそり立ち、下を見れば息をのむ断崖絶壁というように、死と恐怖が鉢合わせの光景であった。それはグレイの期待を十分に満たし得る驚愕体験であったのだ。

I own I have not, as yet, anywhere met with those grand and simple works of art that are to amaze one ... but those of Nature have astonished me beyond expression. In our little journey up to the Grande Chartreuse, I do not remember to have gone ten paces without an exclamation, that there was no restraining: not a precipice, not a torrent, not a cliff, but is

pregnant with religion and poetry. There are certain scenes that would awe an atheist into belief ... [it is] one of the most solemn, the most romantic, and the most astonishing scenes I ever beheld.⁽⁷⁾

(私は人を仰天させるあのように雄大で単純な芸術作品に未だどこにおいても遭遇したことがないことを告白する……自然の作品は私を驚愕させ筆舌に尽くし難かった。グランド・シャルトルーズへの旅で、感嘆なくして十歩も進まなかったのを覚えている。私は押さえることができなかった。どの断崖も、どの急流も、どの絶壁も宗教や詩を示唆している。[それは] これまでで私が見たもっとも荘厳で、もっともロマンチックで、もっとも仰天する光景の一つである……無神論者に畏敬の念を起こし信じさせるような景色があった。)

このような体験はグレイと同時代の詩人たちも共有する。それが崇高という観念につながっていく。スイスは崇高体験の場として人々を惹き付けていき、詩人たちはその感動を華やかに詠った。しかしグレイ自身には崇高体験を詠った詩はない。

18世紀末から19世紀にかけては、ワーズワース、バイロン、シェリーなどロマン派の詩人たちがスイスを訪れ、イギリスにはない険しく荒々しい自然を目の当たりにして、アルプスの山塊や渓谷を讃えた。アルプスは詩人たちの想像力の源泉となったのだ。

ワーズワースは、ナポレオンに征服され、アルプスを追われたスイスに同情を示し *England and Switzerland* (英国とスイス) を詠んだ。*Childe Harold's Pilgrimage* にしばしばスイスを登場させるバイロンは *Clear, Placid Leman* (燈明、静謐のレマン湖) を詠んだ。シェリーは一日で書き上げたと言われる *Mont Blanc: Lines Written in the Vale of Chamouni* (モンブラン、シャモニ谷にて詠める詩) を詠んだ。(国境を接するフランスアルプスも含めて) スイスアルプスやスイスの風景は、詩人たちを驚かした惹き付けた。シェリーは叫ぶ。その叫びは、モンブラン山群を目の当たりにしたことのない人

にも、あたかも峻険な山塊が迫って来て、魂を揺り動かすかのようだ。

Its shapes are heap'd around! rude, bare, and high,
Ghastly, and scarr'd, and riven.

(その姿は四方に積み重なっているのだ！ 荒々しく、むき出しで、高く、
恐ろしく、傷だらけで、そして引き裂かれている。)

シェリーが詠った山塊のイメージは、この時代の詩人たちに共通するものであった。スイスを訪れたことのない詩人たちもスイスを詠った。コールリッジは、天空に突き刺す山塊をまるで目の前にしたかの如く *Chamouny; The Hour Before Sunrise. A Hymn* を詠んだ。アメリカの女流詩人ディキンソン (Emily Dickinson, 1830–1886) は *Our lives are Swiss* (我らの命はスイス) を詠んだ。このようにスイスは詩人の詩想を刺激するのに充分であった。

スイスの魅力は、主に、屹立する高峰、陰しく荒々しい山岳風景、そして湖の3つである。スイスは山岳国家なので、山ばかりが強調されるが、決して山ばかりではない。湖があり、滝がある。それは大きな魅力なのである。スイスには湖が約 1,500 あるが、スイス随一の大きさを誇るのはレマン湖である。この湖の西側に、湖畔に面したヴヴェイ (Vevey) という小さな町がある。喜劇俳優のチャプリンが晩年 24 年間暮らした町で知られている。レマン湖の湖面の眺めが、最も美しく感じられる静かな町の穏やかな湖の遠景に、フランスアルプスがぼんやりかすむ風景は、世俗の穢れをすべて落としてくれる風景でもある。

この町の周辺の様子が、イギリスに帰化したアメリカ人作家ジェイムズ (Henry James, 1843–1916) の初期の作品 *Daisy Miller* (1879) の冒頭に描かれている。この作品には、想像力をかき立てるような描写は特にないが、描かれている情景は 100 年以上たってもあまり変わっていない。ジェイムズはレマン湖を “a lake that it behooves every tourist to visit” (旅人という旅人が

一度は訪れる義務のある湖)と最大級に形容した。これ以外の形容はこれからも生まれることはないだろうと思う。

バイロンやシェリーも、この静謐で澄んだ湖に魅せられた。この国では湖は、詩の、想像力の、源泉なのである。レマン湖には詩人を惹き付けるものがある。フランスアルプスを遠景に広大に広がる湖面を眺めれば、新たな気持ちにしてくれる何か―魔力―があるのである。シェリーの妻メアリーの *Frankenstein* (1818) には、ジュネーブやジュラ山脈やモンブランの麗姿が繰り返し描写されている一方で、レマン湖の周囲の風景を “the calm and heavenly scene” (穏やかで天国のような景色) と形容している。

醜聞まみれで故国を追われたバイロンは、静謐で穏やかなレマン湖を眺めながら、放蕩に身をゆだねた日々を反省している。

once I loved

Torn ocean's roar, but thy soft murmuring

Sounds sweet as if a sister's voice reproved,

That I with stern delights should e'er have been so moved.

(かつての日、私は荒ぶる大洋の咆吼を愛したが

いまこのやわらかなさざめきは、懐かしい姉の声に似て

烈しい快樂に心うごかしたこの身をたしなめる。)⁽⁸⁾

海の猛り狂う姿とスイスの静謐な湖の荒れた姿を比較したらどうなるだろうか。*Frankenstein* に、イギリスの岩だらけの海岸を歩きながら、足もと猛り狂う波の音を、スイスの湖水が波立つときと比べている箇所がある。

その荒れかたはこの大海原の猛るさまにくらべたら、せいぜいが元気な幼児の遊戯というところですよ。(森下訳 p. 215)

湖は荒れても「せいぜいが元気な幼児の遊戯」くらいでは、アルプスの雪崩の怒りや岩石の凄まじい落下ほどではないだろうと想像される。

スイスのもう一つの魅力は滝である。スイスには滝が無数にある。アルプスがあり氷河があるのだから、溶けた水が流れる滝があるのは当然であろう。その滝の偉容が詩人たちを惹き付けた。

ドイツの詩人ゲーテは、ベルン州ラウターブルンネン谷にあるシュタウブバッハの滝を見て感動し、「水の上の精霊の歌」を詠んだ。次はその詩の冒頭である⁽⁹⁾。

人のたましいは／水にさながら／天より来ては／天にのぼり／かくてふたび／地上にくだる／永遠にくり返しつつ

バイロンは、同じ滝を見て“like the tail of a white horse streaming in the wind”（風の中で勢よく進む白馬の尾のよう）と詠った⁽¹⁰⁾。これは黙示録に登場する死に取りつかれた青白い馬の尾を暗示している。

イギリス人作家でスイスの滝にまつわる話と言えば、ドイル (Sir Arthur Conan Doyle, 1859–1930) が有名である。ドイルは、いわゆる「ライヘンバッハの決闘」で、シャーロックホームズが死ぬことになる場所として、ベルン州マイリンゲンにある滝を設定した。滝も想像力の源泉なのである。ライヘンバッハの滝は次のよう描かれている。

巨大な緑色の水柱が轟音をあげて落下し、分厚い水しぶきの震えるカーテンがしゅうしゅう唸りながら舞いあがり、見る者はその絶え間ない激しい動きとすさまじい騒音に頭がくらくらするほどであった⁽¹¹⁾。

4 スイスとヴィクトリア朝の作家

ヴィクトリア朝時代(1837–1901)の1850年代には、小説が文壇の主流に

なる。小説はそれまでは低俗なものと見なされていて、読者人口も少なかったが、この時代多くの小説家が輩出する。

ヴィクトリア朝を代表する作家にディケンズ (Charles Dickens, 1812–1870) がいる。ディケンズはスイスを 1844 年、1845 年、1846 年、そして 1853 年と 4 回訪れている。1845 年にスイスを訪れたとき手紙に “Oh God! What a beautiful country it is! How poor and shrunken, beside it, is Italy in its brightest aspect!” (ああ！スイスはなんて美しい国なのだ。それに比べて、イタリアはもっとも輝かしい面においても、なんてみすぼらしくしなびていることか！) と書いている。

3 度目の訪問の 1846 年 6 月から 11 月までは、ローザンヌの別荘に家族とともに滞在し、*Dombey and Son* と *The Battle of Life* の執筆に取りかかっている。この間、スイスの田舎を旅した。*David Copperfield* や *Great Expectation* にスイスのことが描写されている。例えば、*David Copperfield* の第 58 章に、谷間が夕陽を受けて照り輝く風景に、主人公の心の傷が癒される場面がある。その後、山腹の美しい光景が写実的に描かれている。

ディケンズの友人サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811–1863) は、1851 年に初めてバーゼルからベルンそしてゴッタルト峠に入った。その時の見た周囲の山の様子を、見た目には恐ろしくはないが、“... leading us gradually up to the enormities which we’re to contemplate in a day or two.” (1 日か 2 日経てば見ることになる途方もない大きさに、我々は徐々に引き込まれてしまう) と、あるご婦人に宛てた手紙に書いている。

サッカレーは、1853 年 7 月から 8 月にドイツとスイスを再度訪れた。この時スイスではヴヴェイに滞在し *The Newcomes* の執筆を開始した。この作品には、雪のゴッタルト峠を越えていく場面が少しある。

このようにスイスの美しい風景が、作品の中で何らかの目的で利用されることがある。ロマン派の詩人たちのように作品を貫くモチーフではないが、作家はスイスの何ものかを切り取り写実的に描写する。それに心の傷が癒さ

れたり、慰めになったり、また話の筋を展開するための一場面になったりするるのである。

この時代の詩人はどうか。テニソン (Alfred Tennyson, 1809–1892) は、1846 年にリギ山山頂で一晩を過ごし、ウェンゲンアルプ (Wengern Alp) に登った。この時、テニソンはエドワード・フィッツジェラルドに、“Great mountains disappointed me.” (大きな山々にはがっかりした) と手紙を書いたが、ベルナー・オーバーランドの景色とウェンゲンアルプからの景色は最高だった、と語っている。

アーノルド (Matthew Arnold, 1822–1888) は、スイスと関係が深い。1848 年、26 歳の時スイスを初めて訪れた。その後 3 回 (1849 年、1853 年、1858 年) 訪れている。アーノルドは 1858 年 8 月 6 日に妹に宛てた手紙で “Every one should see the Alps once, to know what they are.” (誰もが一度はアルプスを見るべきだ、それがどんなものかを知るために) と述べている。

アーノルドには *Switzerland* (1852) という詩がある。一部引用してみよう。訳は筆者による。

Ten years! — and to my waking eye
Once more the roofs of Berne appear;
The rocky banks, the terrace high,
The stream! — and do I linger here?

The clouds are on the Oberland,
The Jungfrau snows look faint and far;
But bright are those green fields at hand,
And through those fields comes down the Aar,

(10 年！—私の目覚めている目に

もう一度ベルンアルプスの頂きが現れる。

岩だらけの土手、高い台地に、
小川！－私はここを彷徨うのか。

雲はオーバーランドの上にたなびき
ユングフラウの雪はかすかに遠くに見える。
しかし輝くは近くの青々とした牧草地
その牧草地からアーレ川が流れ来る。)

ロマン派詩人の描いたスイスとは明らかに異なる。崇高を詠うでもなく驚愕を詠うでもない。スイスの風景を写實的に四行連 (quatrain) の形式にのせて淡々と詠っている。穏やかな静寂を連想させるような詩であるが、散文風の芳香をも放っている。

ヴィクトリア朝時代になると、ロマン派詩人たちが熱狂的に描いたスイスのアルプス風景は陰を潜める。舞台をスイスに設定している詩はあるが、かつての熱狂はもはやなくなっていた。グレイやワーズワースの時代にあった驚愕体験としてのアルプスは、道が整備され、鉄道が敷かれ、安全なものに変貌していた。かつての詩人たちが感じた驚愕体験は、商業ツアーの中に組み込まれ、筆舌に尽くせぬほどの驚嘆を体験しようとする「擬似驚愕体験」となり大衆化していく。それと同時に、崇高は失われることになった。

ヴィクトリア朝時代の文人たちも、アルプスを目の当たりにして感動していることが、書簡などから感じ取ることができる。しかしそれを作品に表しているかという点、ロマン派とは異なる。ヴィクトリア朝時代は小説の全盛時代に入っていた。この時代、歴史に名を残す文人を見ても小説家が圧倒的である。詩と散文は異なるものである。散文の中に詩を入れてみれば分かるように、全く異質なものの同士である。崇高美は、詩形式では音楽のように言葉を奏でやすいが、小説では描きにくい。しかし、表現形式の違いに差異を求めるより、アルプス神話というスイスブームが終わっていたと言った方が

正確であろう。崇高や驚愕という全体を貫くモチーフはもう既になく、スイスの一場面を写實的に切り取るだけであった。

それでもなお、ヴィクトリア朝時代に、スイスを訪れたイギリス人の文人には、サッカー、ジョージ・エリオット、アルフレッド・テニスン、ジョージ・メレディスなど多数いる。スイスブームが終わっていたとは言え、同一領域に属する人たちが、これほどまで同じ場所を訪れるのは珍しいし、また注目に値することでもある。

もちろんすべての作家がスイスに好意的なわけではない。世紀末文学の旗手オスカー・ワイルドは“I don't like Switzerland: it has produced nothing but theologians and waiters.”（私はスイスは好きじゃない。スイスは神学者と給仕人を生み出しただけだ）と皮肉っぽく述べたように、スイスを好まない作家たちもいる。

これまで見てきた詩人・作家たちが題材にしたスイスは、彼らの作品群から考えれば、それほど重要ではないかも知れない。事実文学史に残る名作と言われているものは別のところにある。だからと言って、彼らが描くスイスの世界は無視すべきものでもないだろう。ワーズワースやバイロンやシェリー等の詠ったスイスの叙景詩は、実際、スイスを訪れて初めて理解が深まるものなのであるからだ。

次に述べるラスキンの場合は、これまで述べたどの詩人どの作家とも違い、スイスと彼の人生との関係は異様に輝いている。

5 スイスとラスキン

スイスを思い続けたイギリス人と言えば、ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) であろう。ラスキンは画家であり、建築家であり、思想家であり、また詩人でもある。この点において、ラスキンは、上で述べた詩人・作家たちが生涯詩人・作家であったのとは違う。

ラスキンは 1833 年に家族と初めてスイスを訪れてから、最後の旅となる

1888年までの55年間に32回も訪れている。膨大な回数である⁽¹²⁾。

ラスキンは、1833年、14歳のときに初めて両親とスイスを旅した。この時、生涯、研究することになるアルプスをスイス北部にあるシャフハウゼン(Schaffhausen)の滝から初めて見た。ラスキンはその時の様子を、アルプスの美しさは人間の夢想をはるかに越えていた、と記している。

They were as clear as crystal, sharp on the pure horizon sky, and already tinged with rose by the sinking sun. Infinitely beyond all that we had ever thought or dreamed, ... It is not possible to imagine, in any time of the world, a more blessed entrance into life, for a child of such a temperament as mine.⁽¹³⁾

(それ [= 雲] は水晶のように澄みきって、きれいな地平線の空の上に陰しく映え、沈みゆく日の輝きを受けもうばら色に染まっていた。[その景色は] 人間が考えた夢想するものを遙かに超えているようだった……私のような気質の子供には、いつの時も、それ以上の生命への神聖な入り口を想像することはできない)

2回目の旅となる1835年の夏に、家族とジュネーブやシャモニを訪れた。絵画や地質学に興味を持っていたラスキンは、この旅で、地質学上の観察とスケッチ、及び建築学的スケッチを行った。以後、頻繁にシャモニを訪れることになる。シャモニは、現在ではスイスに隣接しフランス南東部のモンブラン山群の麓にある標高1,036mの村であるが、ラスキンは、生涯シャモニをスイス領としていた⁽¹⁴⁾。

1863年、ラスキンは44歳のとき、シャモニの海拔2,000mの所に土地を購入し、そこに建物を建てようと計画した。しかし、ツーリストが増大したため売却することになった。この頃、登山ブームが到来し、アルプスへイギリス人観光客が多数押しかけた。山を愛するラスキンは、山岳登山ブームを快くなく思っており、山にホテルが乱立し、イギリス旅行者たちがアルプスを前に、毎日夏の午後の光の中で「死の舞踏」を演じるのではと懸念を示し

ている⁽¹⁵⁾。しかしながら、ラスキン自身もスイスブームに一役買っていた。1855年に*Modern Painters*の4巻目が出版されると、イギリス人の美術家たちがスイスを訪れるようになるのである。

18世紀半ば、ルソーはヴォー州を舞台とした『新エロイズ』の中で、スイスをこの世の楽園とし、スイスブームを作ることになった。やがて、詩人たちによって、アルプスの山塊が驚愕の対象として語られ始めると、登山ブームがやって来る。19世紀には、トーマス・クックによる観光案内書が、アルプス旅行の大衆化を促進した。案内書や詩人たちの詩を読んだイギリス人旅行者が、崇高美に酔うためにアルプスにやって来るのを、風刺作家サミュエル・バトラーは皮肉っているが⁽¹⁶⁾、それほど多くのイギリス人がスイスに殺到したのであった。ルソーも『新エロイズ』で、パリの住人は田舎へ行っているつもりでいても、田舎へ行ってはいない、歌手、才人、作家、食客がぞろぞろついていき、パリにいる時と同じようにゲーム、音楽、喜劇をしている、つまり、パリを運んでいると非難している⁽¹⁷⁾。

ラスキンはアルピニストではないが、山に関しては造詣が深かった。ラスキンは“Mountains are the beginning and end of all natural scenery.”（山はあらゆる自然の風景の最初で最後である）と述べている。ラスキンはいつもスイス国境に隣接しフランス南東部にあるシャモニを中心に回った。いわばシャモニはラスキンにとってベースキャンプのようなものであり、ここを中心にスイスを回った。晩年、ラスキンは次のように回想した。スイスの山々を一途に思い続けた想いが読み取れる。

いま、回想してみても、すばらしい、賢明な日々をすごしたといえるのは、モンブランや、モンテ・ローザや、ユングフラウを眼前に見てすごした日々だけだったと思う⁽¹⁸⁾。

それほどこの国は豊饒なのだ、とフロイトが、イタリアを絶賛したように、

ラスキンは、外国に来ることがあれば、イタリアよりもシャモニに行くべきだと、アルプスを讃えた。ラスキンがスイスに繰り返し旅したので、*John Ruskin and Switzerland* (John Hayman) というタイトルの本まで出版されている。ロマン主義以降、アルプス神話は徐々に潮が引くように後退したのだが、その中であってラスキンは特異な存在であった。

6 おわりに

スイスの自然を詠った詩人の作品を見ると、彼らがスイスの山塊に魅せられた様子が分かる。イギリスにはない風景に驚愕する。異国趣味も相まって、アルプスは崇高や畏怖の念を生じさせ、想像力の源泉となった。彼らの詩が、多くのイギリス人をスイスに駆り立てた。スイスのイメージは、イギリスの詩人たちによって作られたアルプス神話が源である、と言っても言い過ぎではないだろう。

ロマン主義の時代は、スイスは詩によって崇高が詠いあげられる感動の時代だった。ヴィクトリア朝時代になると、表現形式は詩から小説が主流の時代になるが、小説は崇高を詠いあげるような形式ではなかった。またかつての熱狂は鳴りを潜め、スイスへの憧れが冷めてしまった。ヴィクトリア朝時代の文人たちは相変わらずスイスを訪れてはいるが、スイスの描かれ方には変化が生じていた。作品の一場面として、スイスの風景を写實的に描いてはいるが、ロマン派詩人のような作品を貫くモチーフではなくなっていた。

このような時代にアルプス神話を持続させていたのはラスキンであった。ラスキンほどスイスを訪れたイギリス人はいない。また、ラスキンほどアルプスを擁護したイギリス人はいない。この時代ラスキンは特異な存在だった。スイスにアルプスがなければラスキンもなかったかも知れない。

以上のようなことを考えると、冒頭に引用したコンラッドの「なぜか分からないが、イギリスとスイスは驚くほど似ている」という言葉が、分かるような気がするのである。

(注)

- (1) Joseph Conrad(1857-1924) イギリスの海洋小説家。“I don't know why, but there is a surprising kinship between England and Switzerland.”
<www.isyours.com/e/countries/uk/writers.html>
- (2) <<http://pages.unibas.ch/shine/swistour.html>>
- (3) 小黒訳 (1989: 422)
- (4) ヴィクトリア女王は、ベルン州にあるミューレン (Mürren) という小さな村に滞在した。
- (5) 小黒訳 (1989: 384)
- (6) 小黒訳 (1989: 419)
- (7) グレイの引用は次のサイトより。
<[http://ocw.dmc.keio.ac.jp/j/\]letters/01D-001_j/lecture_contents/handout...](http://ocw.dmc.keio.ac.jp/j/]letters/01D-001_j/lecture_contents/handout...)>
- (8) 阿部訳 (p. 87)
- (9) 高安国世訳
- (10) <<http://books.google.co.jp/books?id...>>
- (11) 小池 (監訳) (p. 130)
- (12) <<http://www.lancs.ac.uk/fass/ruskin/empi/notes/crswt01.htm>>
- (13) <<http://books.google.co.jp/...>>
- (14) 秋山・大社訳 (p. 15)
- (15) 秋山・大社訳 (p. 269)
- (16) 小黒訳 (p. 443)
- (17) 『新エロイーズ』 (第 10 巻 p. 253)
- (18) 近藤 (1960: 821)

REFERENCES

- 阿部知二 (訳). 1973. 『バイロン詩集』. 新潮文庫.
- 秋山康男・大社貞子 (訳). 2010. 『ジョン・ラスキンと地の大聖堂』. 慶応義塾大学出版会.
- Beatie, Andrew. 2006. *The Alps: A Cultural History*. London: Oxford University Press.
- 小林龍一. 2003. 「『モンブラン』に見る精神の再生」. 大阪経大論集第 53 巻 第 5 号.
- 小池滋 (監訳). 1997. 『詳注版 シャーロック・ホームズ全集 7』. ちくま文庫.
- 近藤等. 1960. 「二つの山岳美論」. 早稲田商学 144 号.
- 森下弓子 (訳). 1984. 『フランケンシュタイン』. 創元推理文庫.
- 小黒和子 (訳). 1989. 『暗い山と栄光の山』. 国書刊行会.
- 斎藤勇・大和資雄 (訳). 1981. 『コウルリヂ詩選』. 岩波文庫.
- Schlicke, Paul. 1999. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. London: Oxford University Press.
- 山口四郎 (他訳). 2003. 『ゲーテ全集 第 1 巻』. 潮出版社.
- その他:
- 『ディビットコッパーフールド (五)』. 岩波文庫.
- 『ルソー全集』第 9 巻. (新エロイズ (上)). 白水社.
- 『ルソー全集』第 10 巻. (新エロイズ (下)). 白水社.
- British Tourists in Switzerland
- <<http://pages.unibas.ch/shine/swisstourvict.html>>
- Ruskin and Switzerland
- <<http://www.lancs.ac.uk/fass/ruskin/empi/notes/crswt01.htm>>